

人道の港

敦賀ムゼウム

子どもたちが遺した絵や詩が私たちに教えてくれる

テレジン収容所の 幼い画家たち展



マルギット・コレツォヴァー

2025年11月1日(土)～2026年3月1日(日)

◎開館時間 9:00～17:00 (入館は閉館30分前まで)

◎休館日 水曜日(祝日の場合は翌日)

◎主催:人道の港 敦賀ムゼウム ◎共催:テレジンを語りつぐ会

◎後援:駐日チェコ共和国大使館



チェコ共和国大使館

※子どもたちが遺した4,000枚の絵のうち、本展ではその一部をご紹介します。

会期中、一部展示替えを行う場合があります。



イヨナ・ヴァイツォヴァー



作者不明



スサナ・クライノヴァー

子どもの心に国境はない、80年前も子どもたちは…

テレジンは、ホロコーストの歴史の上では、「アウシュヴィッツという地獄への控え室だった」と言われています。1万5000人いた子どもたちのうち、生き残って平和の日を迎えたのが100人だったという事実は、それを物語っています。でも、子供たちが遺した絵や詩が私たちに教えてくれるのは、決して悲しい事実だけではないのです。

テレジン収容所

1941年、ナチス・ドイツが、占領下においたチェコスロバキア(当時)の首都・プラハから北へ60キロほど離れた小さな街・テレジンに作った収容所。当時はTheresienstadt(テレジェンシュタット)とドイツ語で呼ばれ、アウシュヴィッツへの中継地という役割を果たしていました。なぜ、ここに…? そして、なぜ、テレジン収容所が特別な存在として今も語られるのか…。

子どもたちの遺した絵

1945年、収容所が解放され、ドイツ兵が去ったあとの廃墟に4000枚の絵が残されていました。それを見つけたのは<女の子の家>の世話役をしていたビリー・グロアー。彼は辛い境遇の子どもたちが、目を輝かせ、小さくなったクレヨンを持って一生懸命に絵を描いていたのを知っていました。そして、その子どもたちがもう帰ってこないのだということも。

子どもたちが遺した詩

1945年5月8日、解放されたテレジン収容所には子どもたちが書いた4000枚の絵とともに、数十枚の詩が残されていました。詩は、どれも小さな紙切れに、小さな文字で書かれ大切にどこかへしまっていたのでしょう…。紙はすり切れ、字が読めないものも多いのです。

企画展関連 野村路子氏講演会

1万5000人のアンネ・フランク～絵を描くことは生きる力～

11月3日(月・祝) 14:00～15:30(13:30開場)【申込不要・先着50名】

野村 路子 (のむら みちこ) ノンフィクション作家・テレジンを語りつぐ会代表

1937年東京生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。コピーライター、タウン誌編集長を経て、新聞・雑誌にエッセイ、ルポルタージュなどを執筆。1989年、チェコのプラハで、ホロコーストの犠牲になった子どもたちが生前に描き遺した絵と出会い、子どもたちの生きる力、それを支えようとした大人の勇氣に感動し、その事実を日本で伝えようと展覧会を企画。チェコ政府の協力もあって、91年から『テレジン収容所の幼い画家たち展』を開催。アウシュヴィッツ、テレジン収容所など訪問は20回以上。数少ない生き残りの方への取材をかさね、執筆・講演会活動などを続けている。『テレジンの小さな画家たち・詩人たち』『子どもたちのアウシュヴィッツ』など著書多数。『テレジンの小さな画家たち』で、産経児童出版文化賞大賞受賞。『小学校6年国語教科書(学校図書)』に、「フリードルとテレジンの小さな画家たち」が掲載されている。

